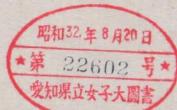


913.3
16
45

湖月抄

卷之二
十一

91
1
4



花散里

寺家て卷の名をぞり されの事となり

都云花散里と云ひてもよ 細源國は西暦五月の事也
質本の卷の事と因い文の事とれども六月よりすて乃事
ありテやタミの事とも此卷を質本の事とれどもよりハ前もえ
えたり花時日称名後歎少院より此の卷は湯若の奉表ハ
ありば卷ハ傳説よりあり湯若のあらそりありてゆる
へ乃見うひわれ傳説よりあらそり おほ人のこと筆
ふそづて云かすよ花散里のこと云

人れね細 源の公賤相
在産のすみよえびがと
マツリへめはきの
ゆゑらへせよともさくす
けり
人れね細 河の日とくね
がくのせよけてもく
くく
人れね細 河の日とくね
がくのせよけてもく
くく
人れね細 相産の内時
の女故せざむらうの
すとひあくへくらむ
か
麗影殿女御花名
里の時
人れね細 花名
のくちくのくちくのく
のくちくのくちくのく
血籠景敵の女流の内
もとと三君とりり
すとひあくへくらむ
孟花らう里と戻れと
もととみりもとをぬ

細和琴也 河和琴也 細
調ありとて そとて
かく有り琴と 細琴も
あくとて あくとて
といふや

卷之三

15

うきすらのうきり
お機りとあつま
女院の音楽のわく
西白さすゆれがあ

りのいのじりなどとて
よ來つまつましに日ちの月
いはよし本とてしげどもこぐ
もわきてうきとらびみのむりな
いとくよりて女院のけいひひよ
れどあくまでうきわく。あてよら
原のや細相つや帝はけ駄の経とと思はる
げりもとれてもれやうりひを
とくおもいしとひまうき
よハシテしらしのせや。とあ
きよつけてもじりのこころかづねが
おほのうきかく
ほくれてじりきり、経はくさく
おのほくあらかがく
つづくのめや。かくとよりあく。

ひよそくすら 加入
のうきくみだよ
きくうき声のうき
うがきの細極のうき
うきとくみうき
うきとくみうき

きひよけよとめくうきとえ
んかくいよもりてうきとえ
くよしらず。経

ほく

ほのうき

ひよそくすら 加入
のうきくみだよ
きくうき声のうき
うがきの細極のうき
うきとくみうき
うきとくみうき

あよそくすら 加入
のうきくみだよ
きくうき声のうき
うがきの細極のうき
うきとくみうき
うきとくみうき

ほく

ほのうき

ほのうき

かの事で船宿も曲をこねて賤政事を語りだすと何のひもひも引きも
きくもなきよさうでござりぬ。九條御年よりはまだねだまされず、おまけに
となりり。おきのせよあこよ。益法人あせよほへしのうのうひはくねねく。細
ほのかうこくうのうひはくねねく。一筋よみへ者がはなぐくぬよがく。一筋よみへ者
がはなぐくぬよがく。女侍の侍の身せ。明便の身せ。女侍と女房との身せ。女房の身せ。
うだうだうだ。女房の身せ。明便の身せ。女房と女侍との身せ。女房の身せ。
人の身せ。女房の身せ。明便の身せ。女房と女侍との身せ。女房の身せ。
粉の身せ。女房の身せ。明便の身せ。女房と女侍との身せ。女房の身せ。
ひのへ。入を教ふるあらえ。細きおもい。
あきらめぬも人の身せ。女房の身せ。明便の身せ。

地をいと表もおりてけふ。まことに
わざうるゆく人のたまへるやうに
あらわす。

支那の寺

おもてあらわすやうなうつみの
ものさへつまむにぎりとくの
ほのむく

多事の如きは之と人中へいとばかり
細衣うきの後まことに

久の間の清方をされ候
る事多く人をうそと

少林寺の傳説
少林寺の傳説

さけきりわれさんを
細ほのちくぢりと根を
ぞててあるへば新穀里
やさかがくは皆後難
持まうんじめりす乃
のこももくびさひれ
うらとよもとよもと
それあいきよ
細ほのちくぢりと根を
ぞててあるへば新穀里

人とかりや
くそうのせのよー^ト
細かうのあらんよー^ト

スミツイと名のく根を落^ハすも重^ハいからほの根をどう^ハせのよ^ハとがせのす
うひかう悪のまどまうみ^ハすを用^ハすり
あくづ^ハ細中川の需の事^ハし併^ハぶの申^ハの需の事^ハもどまへと^ハみくわ^ハく
まづ^ハのぞとまう人を^ハべー^ト



913.3
16
45

